

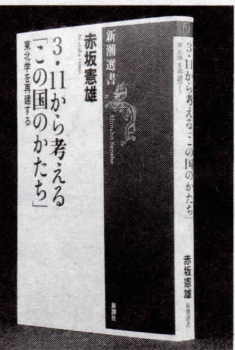
3・11から考える「この国のかたち」

評・三浦 佑之

〔古代文学研究者〕
立正大教授

たった独りで東北学を立ち上げ、各地を歩いて種を蒔き大きな運動体に育ててきた。そして、拠点を東京に移した矢先に大惨事が東北を揺さぶる。その地震と津波と放射能は、

未来へどう踏み出すか

新潮選書
1200円

東北を完膚なきまでに叩きのめしたが、赤坂憲雄もまた叩きのめされたのではなかったか。自分のせいではないとわかってはいても、東北を離れたとたんの悪夢だったのだから。

政府が設置した復興構想会議の委員となって未来を見据えた提言を行い、新聞や雑誌や講演でさまざまなメッセージを発しながら三陸や福島各地を見てまわる赤坂の行動からは、東北への哀惜と苦衷の気持ちが生み出しているようにみえる。そして今ようやく、何をしなければならぬのかが見えてきたのではないかと、本書を読んで感じた。

民俗学や伝承文学など人文研究に

かかわる者にとって、大震災とそれ以後にどのように向き合えばいいのか、なんともやるせない思いにかられる。そして本書を読んで教えられたのは、生き残った者と死者たちとの「和解」ということだ。被災地の海辺では数も知れぬ幽霊譚が語られているという。その背景

には、なぜ生き残ったのが私かという不条理ともいえる思いがあると著者は指摘する。そこから、どのように死者の魂を鎮め、その上で生き残った者は未来へどう踏み出すか、その微妙なところに向き合いながら、「東北学を再建する」道を見いだそうとする。

今も津波に襲われたままに放置された三陸海岸の集落は、「平成の市町村合併で一つになった自治体の周縁部」という指摘にドキリとさせられる。何度も歩いてきたから見えるのだ。また、地盤が沈み津波に流された沿岸には、いくつものラグーン（潟湖）が出現しているという指摘も、それは日本海側の専売だと思っていた私にはとても刺激的だ。しかも、泥の海を直前の水田にもどすのではなく、50年後を見据えて、昔の自然にもどそうと著者は言う。まさに人文学からの提言だと思う。

◇あかさかのりお 1953年生まれ。学習院大教授。福島県立博物館長、遠野文化研究センター所長も務める。